



TITLE:

嵯康の飛翔

AUTHOR(S):

興膳, 宏

CITATION:

興膳, 宏. 嵯康の飛翔. 中國文學報 1962, 16: 1-28

ISSUE DATE:

1962-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/177123>

RIGHT:

嵇康の飛翔

興 膳 宏

京都大學

魏の滅亡にわずか三年先だつ景元三年（二六二）、友人呂安の獄に坐した嵇康が、日影を顧みつつ琴を弾じ、従容として死についた後、人々の記憶にはまた新しい一個の人間像が刻みこまれた。魏晉交替期という權力間の激しい争闘の渦中で、幾多の生命が世上における自らの位置を懸命に確保しようと努めながら、結局非情な運命の前に屈していったとき、嵇康はむしろこうした争いの世界を超越的に去ろうとしながら、不本意にも權力の毒牙にかかったのであった。かたくななまでの一途さで自己の世界を守り續けて、非命に倒れた一人の知識人の悲劇であつた。

嵇康の飛翔（興膳）

しかし彼の死が歴史の上でもつ意味は、決して一つの高潔な魂が地上から抹殺されたというだけにはとどまらない。嵇康の蹉跎のきつかけとなつたのが呂巽・呂安兄弟^{そん}からむスキャンダルだつたとはいいながら、司馬氏に嵇康斷罪の腹を固めさせた眞の理由が、彼の奔放な反體制的思想にあつたことは想像に難くない。告發者鍾會の彼に對する論告の嚴しさは、司馬氏一統の深い憎惡をまざまざと思わせるものがある。「今皇道開明して、四海風靡し、邊鄙に詭隨の民無く、街巷に異口の議無し。しかるに康は上は天子に臣たらず、下は王侯に事えず、時を輕んじて世に傲り、物用を爲さず。今に益無く、俗に敗有り。昔太公の華士を誅し、孔子の少正卯を戮せしは、其の才を負みて羣を亂し衆を惑わすを以てなり。今康を誅せずんば、以て王道を清潔にする無し。」（世說新語雅量篇劉注引文士傳）官途に仕えず、獨り倨傲尊大の言を吐いて「羣を亂し衆を惑」わせた者、これが彼のこうむつた最大の罪だつたのである。世を亂し惑わすべく、嵇康が何らかの行動を起したのではなかつた以上、これは政治にあずかることを嫌惡し、世事と隔

絶した形而上の世界に活路を求めた彼の思想が弾劾されたというにも等しかつた。「これは信教上の意見や、個人の奉ずる哲學のために、儒教體制からの迫害を受けた人物の最初の例の一つである。」(D. Holzman : «La vie et la pensée de Hi K'ang» 1957. Leiden. p. 48) (傍點筆者) といった斷定を敢えて下すべきかどうかは判斷の問題に屬するとしても、數十年昔、曹操の禁酒令に眞つ向から挑んで、衆を惑わすものとして罪せられた孔融の場合に比較すると、嵇康の死に、行動よりはむしろ思想に殉じた殉教者のな色彩の濃いことは事實であるといつてよからう。獄舍での遺作「幽憤詩」の最後で、「薇を山阿に采り、髪を巖岫に散らす。永く嘯き長く吟じ、性を頤い壽を養わん。」と述べた宿願はついに達成されることなく終つたが、後世の詩人がしばしば思いを馳せたのは、ひたむきに理想に向つて歩み續けながら、意想外の障害に足をすくわれた、その瞬間の嵇康のイメージではなかつたか。その一つ、宋の顔延之は「五君詠五首」の中で次のように嵇康像を描いている。

中散不偶世

中散は世に偶せず

本自餐霞人

本と自から霞を餐するの人なり

形解驗默仙

形は解して默仙を驗し

吐論知凝神

論を吐きて神を凝らすを知る

立俗近流議

俗に立ちて流議に近い

尋山治隱淪

山を尋ねて隱淪に治し

鸞翮有時鍛

鸞翮 時に鍛がるる有り

龍性誰能馴

龍性 誰か能く馴らさん

傳えによれば、嵇康の死後その魂は肉體を離れて仙化したといひ、また彼が養生論を著わしたとき、京師の人皆彼を目して神人と稱したという。文選李善注が引く如く、

「凝神」の語は莊子逍遙遊にみえる藐姑射の山の神人——

肌は雪のように白く、姿態は妙なる處女にも似て、風を吸

い露を飲み、雲氣に乗り飛龍を御して四海の外に遊ぶ超越

者の姿を彷彿させる。顔延之はいささか誇張された表現で、

嵇康の異常な才能が世にところを得なかつたことを惜しむ

のであるが、なかならず最後の二句に彼の嵇康觀は凝縮さ

れている。「鸞翮」——汚辱の現世から羽ばたき去ろうと

した翼は司馬氏の權力によつて無残にも打ちひしがれたけれども、この俊鳥が地上に拉致された後には、天上遙かな何處かを志向して永遠の羽ばたきを續ける一つのイメージ

が人々の記憶に残された。鍾會は司馬昭に向つて「嵇康は臥龍です。起してはなりません」と告げたと伝えられるが、その不羈の精神——「龍性」は究極爲政者の干渉を斥けて、ひとり活動を止めなかつたのである。およそ濃縮された嵇康のイメージとして、これ以上に適確なものを私は知らない。理想にあくがれて現世を飛びたつ飛鳥のイメージが嵇康自身の詩にひんばんに描かれる事實を顔延之はここで踏まえていたに違いない。さらにその後南朝の江淹が「雜體詩三十首」の中で嵇康の詩風を模すべく用いたのも、世俗を去つた仙界に飛翔する鳥のイメージであつた。「靈鳳は羽儀を振い、景を西海の濱に戢む、朝に琅玕の實を食ひ、夕に玉池の津に飲む。」また劉勰が文心雕龍才略篇で「嵇康は心を師として以て論を遣り、阮籍は氣を以て詩に命ず。聲を殊にして響を合し、翮を異にして飛を同じうす。」といったときも、恐らく單なる比喻以上の意味が籠

嵇康の飛翔（興膳）

められていたであらう。（後述する通り、阮籍の詩にもしばしば飛鳥が描かれている。）

嵇康の文學、また彼の生き方が渾然として示唆するのはまさにこうしたイメージであり、詩中の飛鳥は一途に理想を追つて飛び續けるかに見えながら、その蔭には思惟する人間としての複雑な内面を暗示する多様な問題が秘められているようである。以下私は飛鳥のイメージを媒介としながら、嵇康の文學のメカニズムを採つてゆくことにしたい。

二

魯迅「嵇康集」が「五言古意一首」と題する五言詩は、黃省曾本その他では連作「贈秀才入軍十九首」の最後に組み入れられているが、ここに登場するのは天上遙かな仙境を飛び交う二羽の鸞鳥である。（以下に引用する詩は、前稿と同じく、いずれも魯迅「嵇康集」に據るのを原則とする。）

雙鸞匿景曜

雙鸞は景曜を匿し

戢翼太山崖

翼を太山の崖に戢む

抗首嗽朝露

首を抗げて朝露に嗽ぎ

晴陽振羽儀 陽に晞ささして羽儀を振う
長鳴戲雲中 長鳴して雲中に戯れ
時下息蘭池 時に下つて蘭池に息う
自謂絶塵埃 自ら謂おもえらく 塵埃を絶ち
終始永不虧 終始とこし永えに虧けずと
何意世多艱 何ぞ意おもわん 世は艱多く
虞人來我維 虞人來つて我を維つながんとは
雲罔塞四區 雲罔は四區に塞がり
高羅正參差 高羅は正に參差たり
奮迅勢不便 奮迅すれども勢い便ならず
六翮無所施 六翮は施おはす所無し
隱姿就長纓 姿を隱して長纓に就つき
卒爲時所羈 卒に時の羈する所と爲る
單雄翩獨逝 單雄は翩として獨り逝き
哀吟傷生離 哀吟して生離を傷いたむ
徘徊戀儔侶 徘徊して儔侶を戀い
慷慨高山陂 高山の陂さかに慷慨す
鳥盡良弓藏 鳥盡くれば良弓は藏され

謀極身必危 謀はかりごと 極まれば身は必らず危うし
吉凶雖在己 吉凶は己れにありと雖も
世路多嶮巇 世路には嶮巇多し
安得反初服 安んぞ得ん 初服に反つて
抱玉寶六奇 玉を抱き六奇を寶たうとばんことを
逍遙遊太清 逍遙して太清に遊び
攜手相追隨 手を攜えて相い追隨せん
この詩を兄嵇喜との送別に際して作られた連作詩中の一首であるとするならば、四言詩十八首の末尾にこの五言詩一首を附した嵇康の意圖はどこにあつたのだろうか。蓋し、四言詩という本質的に抽象性を免れ難い詩體を用いて、暗示的に、そうして詩群の連りによる漸増的な感情の高まりという効果を加えながら展開してきた惜別のテーマを、一轉して、四言よりは遙かに具象的描寫力に富む五言詩によつて綜括してみせたとみるのが恐らく當を得ているであらう。然らば大空を翔けめぐる雙鸞は、また嵇康兄弟の象徴としての役割を賦與されているものとしなければならぬ。
いま雙鸞は俗界を遠く去つた遙かな空の高みをのどやか

に飛びめぐっている。この設定は連作十九首の冒頭に登場した鴛鴦の飛翔と通い合う發想にもとづいているが、句を追うにしたがつて、詩はおのずと趣きを異にしてくる。何よりもまずここでは、四言詩にはみられなかつた細かな描寫、微妙な陰翳や、寓意的效果が際だつて目を引くといえよう。鴛鴦の飛翔はやがて互いに離れてゆく悲しみを内に秘めながらも、それはなお極めて隱微な感情であり、飛鳥は終始はらからの睦まじさを失わなかつたが、この詩になると、その至福の状態は束の間に潰え去つてしまふ一場の夢でしかない。並び飛んでいた鸞の一羽は突如網羅に身の自由を奪われて天上から墜ち、とり残された一羽は哀吟しつつ徘徊しては伴侶の姿を求める。にわかに天上の樂園の夢消えて、險しく暗い現實が大きく彼等の前に立ちはかかるのである。「卒に時の羈する所と爲」つた一羽が、今や官途に身を投じた兄嵇喜であり、「徘徊して儔侶を戀うる」一羽が嵇康自身であることはいうまでもない。

さらに、一連の四言詩になかつたものとして、この詩では二羽の鸞鳥に離別という不幸をもたらしした「雲罔」「高

羅」といういわば人間の惡意を認知していることがあげられよう。十八首の四言詩のある詩では、兄の入軍を諷諭し擲揄した嵇康ではあつたが、それが他者の惡意の干涉によつて惹起されたとみなす態度は全くなかつた。離別はあくまでも二人のはらからの間に生じた、如何ともすべからざる運命的な不幸として詠嘆されていた。だがいまは違ふ。「姿を隠して長纓に就き、卒に時の羈する所と爲る」とは、兄の入軍を外からの望ましからざる契機によつてもたらされた不幸な結果と見ることであるに違ひない。そうしてまた「網羅」に籠められた人間の惡意は、兄を俗界に拉致しただけでなく、嵇康自身をも秘かに狙うものとして意識されているようである。

いつたい飛鳥を別離におけるメタファーとして用いることは、漢の古詩以來、詩の常套的な技法の一つになつていたようである。あるときには嵇康の雙鸞のごとく、雲中に離れ行く二羽の飛鳥を以て別れゆく二人の姿を描き、またあるときには去りゆく人の姿をなつかしみつつ、飛鳥となつて旅人の後慕いゆかんものという祈願を託して描かれ

る。(嵇康の先輩である建安の詩人たちにおける普遍的な飛鳥のイメージがいかなるものであつたかは最後の章に述べる。) しかしまたある詩の中でも、嵇康の雙鸞の詩と發想あるいは構成において極めて酷似するのは古樂府「雙白鵠」(「豔歌何嘗行」一首である。^④)

飛來雙白鵠 飛び來る雙白鵠

乃從西北來 乃ち西北從り來る

十將五五 十將た五五

羅列行不齊 羅列して行齊しからず

忽然卒疲病 忽然として卒に疲病し

不能飛相隨 飛びて相い隨う能わず

五里一反顧 五里 一たび反顧し

六里一徘徊 六里 一たび徘徊す

吾欲銜汝去 吾は汝を銜みて去らんと欲するも

口噤不能開 口噤みて開く能わず

吾將負汝去 吾は將に汝を負いて去らんとするも

羽毛日摧頽 羽毛は日びに摧頽す

樂哉新相知 樂しい哉 新相知

憂來生別離 憂い來る 生別離

躊躇顧羣侶 躊躇して羣侶を顧み

淚落縱橫垂 淚落ちて縱橫に垂る

今日樂相樂 今日樂しみて相い樂しみ

延年萬歲期 延年して萬歲を期せん

大空の高みをのどかに飛び翔つていたつがいの白鵠の一羽が病いのために力盡きて落ちてゆく。伴侶を失つた一羽は悲しみに堪えず、哀吟しつつ空中をたちもとおる。ここで注意を喚起しておきたいのは、この素描がほぼそのまま嵇康「雙鸞」の詩一篇の構圖となつてゐることである。もちろん雙白鵠のイメージは、夫婦のいたましい生別離をいささかの感傷を交えつつ形象化したものであり、嵇康の場合には、もはやこうした素朴な抒情の域を出て、もつと深遠な思辨性を託そうとしているという違いは歴然としてゐるにしても、裏を返してみれば、「雙白鵠」的な民謡風の發想に依據しつつ、すでに常套化した飛鳥のイメージを新たな次元にまで引き上げようとする意圖が働いてゐるとみることができるとはなからうか。テキストによつてこの

詩を「五言古意一首」と名づけるゆえんも、古樂府「雙白鵲」の如く普遍化した飛鳥のイメージをふまえている點にあるとするのが恐らく當つているであらう。因みに、後述する何晏の「擬古」一首は「鴻鵠比翼遊」と飛鳥のイメージにはじまり、構圖の上で「雙白鵲」や嵇康の雙鸞の詩に通じるものがあるが、愚考するところ、題名の「古」一字が暗に藏するのは、やはり古詩において固定した飛鳥のイメージの問題と察せられる。^⑥

かく普遍的發想から出發した上で、嵇康はいかに自らの獨創を加えていつたかという問題が當然ここで提出されねばなるまい。

まず第一にあげられるのは「雙鸞」の詩の有する超現實的性格である。「雙鸞は景曜を匿し、翼を太山の崖に戢む。」という冒頭は、すでに詩の舞臺が矮小な常識の支配を絶した世界にあることを宣言している。詩はまた續けていう。「自ら謂えらく塵埃を絶ち、終始永えに虧けずと。」ここは嵇康の理想とした精神の絶對者の歸りゆくところ、區外の世界であり、この狀況設定は以後に展開する嵇康の

嵇康の飛翔（興膳）

論理に照らすとき、一種の必然性を帯びている。つまり超脫的メタフィジックの假託物としての役割をもつてゐるのである。他方、古樂府「雙白鵲」の舞臺が高空の高みであるのは、飛鳥のイメージをみちびくための、いわば一次的必然性だけにすぎず、「超俗」という觀念を何らはらむものではなかつた。情況設定の上ですでにこのような古詩との微妙なズレを確かめ得るとすれば、鸞鳥も單なる別離のメタファー以外の何ものであることを我々は必然的に豫想することにならう。この脱俗の世界を飛び交う雙鸞は、一切の現實との絆を斷ち切つた精神の自由人・超越者へのあこがれを含むかのようなのである。鸞は鳳凰の屬であつて俊鳥とされ、楚辭九章の王逸注に「君に聖德有れば來り、德無ければ去る。」というように、衆鳥から抜き出た靈質を湛える鳥である。この靈鳥は、絶對の自由にあこがれる嵇康自身の強い志向をはらむことによつて、あの莊子逍遙遊篇の雄大な鵬の飛翔を思いおこさせるものがある。詩の最後で、「逍遙して太清に遊び、手を攜えて相い追隨せん。」と莊子の篇名を用いたことばで切なる願望を披瀝していること

からも察せられるように、嵇康の精神は自由を求め理想にあぐがれて、鸞鳥とともにいま大きく羽ばたこうとしている。彼の詩にあらわれる飛鳥のイメージは、そのほとんどすべてがこうした精神の飛翔を宿しているといつてもよいほどである。

焦鵬振六翮

焦鵬、六翮を振え

羅者安所羅

羅者に安んぞ羈せ所れんや

浮遊泰清中

浮遊す 泰清の中

更求新相知

更に求む 新相知

比翼翔雲漢

翼を比べて雲漢に翔り

飲露食瓊枝

露を飲み瓊枝を食う

(述志詩二首其一)

斥鷃擅蒿林

斥鷃は蒿林を擅に

仰笑鸞鳳飛

仰いで鸞鳳の飛ぶを笑う

(述志詩二首其二)

鸞鳳避罽羅

鸞鳳は罽羅を避け

遠託崑崙墟

遠く崑崙の墟に託す

(答二郭三首其三)

第二の例にみえる鸞鳳の飛翔を笑う小賢しい斥鷃の話が、莊子逍遙遊にもとづくことはいうまでもない。次に一首全體が飛鳥のイメージに終始する一篇をあげておこう。

眇眇翔鸞

眇眇として翔ける鸞は

舒翼太清

翼を太清に舒ばす

俯眺紫辰

俯して紫辰を眺め

仰看素庭

仰いで素庭を看る

凌躡玄虛

玄虛を凌躡し

浮沈無形

無形に浮沈す

將遊區外

將に區外に遊ばんとして

嘯侶長鳴

侶に嘯き長く鳴く

神□不存

神□存せず

誰與獨征

誰と與にか獨征せん

(四言詩十一首其八)

この一首などは、狀況設定もさきの「雙鸞」の詩とはほぼ同じであるが、以上連ねたいくつかの飛鳥のイメージから、我々は一つの法則を歸納することができる。それは嵇康の飛鳥はいずれも實景としてではなく、全くのイメージネーシ

マソンの所産として描かれ、しかも多くの場合仙界に遊ぶ超越者の姿を暗示していることである。つまりこれらの飛鳥は莊子の鵬の飛翔の性格をそれぞれ何らかの程度賦與されており、嵇康の精神世界における至上の境地をメタフォリックに表現しているとみることができるのである。

このような天翔ける飛鳥のイメージが示唆する嵇康の志向はまた往々にして、メタファーを用いず、遊仙のあこがれへの直截な表現をとる詩を生むに至る。

思與王喬 思う 王喬と

乗雲遊八極 雲に乗りて八極に遊ばんことを

陵厲五岳 五岳を陵厲し

忽行萬億 忽ち萬億を行く

授我神藥 我に神藥を授け

自生羽翼 自ずから羽翼を生ず

呼吸太和 太和に呼吸し

練形易色 形を練り色を易う

歌以言之 歌いて以て之を言えば

思行遊八極 行きて八極に遊ばんことを思う

嵇康の飛翔（興膳）

（秋胡行七首其六）

この系統に屬する詩にはほかに「贈秀才入軍十九首」其十六其十七、「遊仙詩」、「四言詩十一首」其十、「五言詩三首」其三などがある。嵇康をして實にさまざまのことは、表現を通して遊仙の志を描かせたものは何であつたろうか。最も重要なモメントとなるのは養生論一篇に代表される彼の超俗の哲學であり、あるいは漢の古詩以來人々の遙かな理想としてあつた養生延壽の願いであり、さらに想像を逞しうするならば、朝まだきの空に揚げ雲雀さながらに胸の思いのたちのぼりゆくポオドレルの *Élévation* の如き精神解放の欣びであつたかもしれない。しかし更に嵇康の詩を分析してゆくと、この望ましかるべき境地の對極としてしばしば俗世・現世が意識に上つていることに氣づく筈であり、端的にそれを示すのは「俗人」の一語である。「長く俗人と別れ、誰か能く其の蹤を親ん。」（遊仙詩）「俗人は親しむべからず、松喬は是れ鄰りすべし。」（五言詩三首其三）また富・名譽といった社會が通常價值と認めるものに對して嵇康は積極的な反撥を示す。「富貴尊榮なるは、

憂患まこと諒に獨り多し。」（秋胡行七首其二）、「榮名は人身を穢けがし、高位は災患多し。」（與阮德如）「權智は相い傾奪し、名位は居るべからず。」（答二郭三首其三）

これら俗世からの背離を示すことばは遊仙の志の中に現實脫出という契機働いていたことを思わせるが、「與山巨源絶交書」の中で嵇康自らの述懐するところによれば、彼には俗世にいて人なみに官途に仕えることのできぬ九つの理由「九患」があつた。最初の七つは彼自身の性情が到底容認し得ぬもの「不堪者」であり、一、役人になれば好きな朝寢ができぬ。二、勝手氣ままに山野を彷徨できなくなる。三、生來行儀が悪く、身なりを整え威儀を正して上役を拜することなどできぬ。四、生まれついで筆不精、勤勉に手紙を書くことができぬ。五、弔喪が嫌いで俗習に従えぬ。六、俗人が嫌いで彼らと同席したり、共に事を行うことができぬ。七、煩わしいことが嫌いで、役所仕事に心を煩わされるのは我慢できぬ。以上七つの理由によつて彼は仕官をいさぎよしとしなかつた。「九患」の後の二つは本性的に官吏として不適格な理由「不可者」であり、一、

湯武を非そしり周孔を薄うとんずる思想が世に合しない。二、剛直で惡をにくみ、齒に衣きせずほしいままに直言する。この二つの理由から自分を官吏としての資格喪失者だとしたのであつた。そうして「促中小心の性を以て此の九患を統すぶるに、外難有らずんば、當に内病有るべし。寧なんぞ久しく人間に處おるべけん邪や。」ときつぱりと俗世との絶縁を宣言している。嵇康自らがかく意識していた「九患」はまさしく彼を自律的に脱俗の志向に導いたものであつたが、彼はただ單なる世のすね者としてニヒリスティックに世間に背を向けたわけではなかつた。彼の生涯をあとづけてみるに、彼を他律的に現實の世界から排除した由々しい外的な動機動機の存在を見逃すことはできない。彼の詩に飛鳥の高翔をはばむようにしてあらわれる網羅のイメージこそは、何にもまして彼をとり卷いた暗い現實に我々の思いをかりたててゆくものである。

ここで我々は再び雙鸞の詩に戻ろう。雙鸞は突然その前に立ち塞がった障害のために飛翔を遮られ、「塵埃を絶とち終始と永とえに虧とけず」と思つた超俗の世界は忽ちにしてつい

え去る。「雲罔は四區に塞がり、高羅は正に參差たり。」

遙かに俗塵を絶つた筈のこの世界にまで人間の惡意の手は執拗に伸びていた。つれあいを網羅の干涉によつて失つた鸞鳥は、悲しみにうちひしがれながら、「鳥盡くれば良弓藏され、謀極まれば身は必らず危うし」と改めて人間の惡意に思いを致し、「逍遙して太清に遊」ばんと、再び安全の境めざして羽ばたきいでようとするのである。雙鸞の飛翔にみられる區外に遊ぼうとする志向は、人間の惡意から逃避しようとする志向と常にうらはらであり、網羅のイメージには人間の惡意への深刻な恐れが籠められているようである。高翔する精神と、それを遮ろうとする網羅——この發想上の二重構造は嵇康の詩においてしばしば指摘することができ、先にあげた「鸞鳳は罽羅を避け、遠く崑崙の墟に託す。」（答二郭三首其三）や「焦鵬六翮を振え、羅者に安んぞ羈せ所れんや。」（述志詩二首其一）などの句はすでにその例であつた。以下彼の詩における網羅のイメージをいくつかあげてみよう。

人害其上　　人は其の上を害いそこな

嵇康の飛翔（興膳）

獸惡網羅　　獸は網羅を惡むにく

（秋胡行七首其一）

人生譬朝露　　人生は朝露に譬う

世變多百羅　　世變　百羅多し

（五言詩三首其一）

翩翩鳳轄　　翩翩たる鳳轄は

逢此網羅　　此の網羅に逢う

（逸詩遊仙詩）

坎壤趣世教　　坎壤　世教に趣けば

常恐嬰網羅　　常に網羅に嬰らんことを恐る

（答二郭三首其二）

最後にあげた詩で「網羅に嬰らんこと」への恐れは、詩の後半で「豈に若かんや區外に翔りて、瓊を喰し朝霞に漱がんに。物を遺れて鄙累を棄て、逍遙して太和に遊ばん。」という超脱への志向となつて昇華してゆく。これは「雙鸞」の詩が展開してきた主張と論理の發展において酷似しているといえよう。嵇康にとつて超脱は内面的必然であつたとともに、彼が身を置いた現實の惡意が一方でそれを必然な

らしめていたのもまた事實だつた。Elevation では輕快な精神の飛翔をうたつたボオドレルが、あるときには「どこでもよい、どこでもよい、ただこの世の外でさえあれば、」(《Petits poèmes en prose》)と魂のうめき聲を發したように、太清に遊ぶ鷺鷥の六翮も決して輕快でばかりはあり得なかつたであらう。

三

「飛鳥」と「網羅」の對立から醸しだされる隱鬱な危機感、玄學者として嵇康の先輩ともいふべき何晏の「擬古」一首にもみられる。(ここでは世說新語規箴篇注に引く名士傳によつて引用する。)

鴻鵠比翼遊

鴻鵠は翼を比べて遊び

羣飛戲太清

羣飛して太清に戯る

常畏失網羅

常に畏る 網羅に失し

憂禍一旦并

憂禍の一旦に并ざらんことを

豈若集五湖

豈に若かんや 五湖に集いて

從流嘜浮萍

流れに従い浮萍を暖むに

永寧曠中懷

永く寧んじて中懷を曠くせん

何爲怵惕驚

何爲れぞ怵惕して驚かんや

「詩品」はこの詩について「平叔鴻鵠の篇、風規見わる」

という評を與えている。一見してまず注目すべきは、この詩の發想が嵇康「雙鷺」の詩に極めてよく似ていることである。ここにおける鴻鵠の飛翔も超脱へのあこがれと、人間の惡意からの逃避という二つの志向の交點の上で形成されたイメージにはかなならぬ。ただ想像するに、何晏の場合はこの二つの志向のうち、前者よりも後者がイメージ形成のより強い動機として存在したのではなかつたらうか。それはまず詩中嵇康ほどには理想世界への積極的憧憬が感じられないこと、また彼の生涯を思い合せてみると、嵇康とちがつて何晏は實力者曹爽の幕僚として、一時的にもしる權力の座につき、專横をほしきままにして、いわば「至人」とは對照的な「當路の人」としての一面をもつていたことなどから考えられる相違である。初學記に見える彼の失題の詩は、「且く以て今日を樂しみ、其の後を知る所に非ず」の二句を以て結ばれるが、このデスパレートな利那

主義は嵇康との間にかかなりの距離を感じさせる。かかるニエアンスの上の相違はあるにしろ、詩の背後に搖曳する暗い危機感には、嵇康の詩と共通する何かただならぬ異様さがこもる。名士傳によれば、何晏がこの詩を創作したにについては次のような事情があるという。「是の時曹爽政を輔するに、識者危機有らんことを慮る。晏は重名有り、魏と姻戚なり。内に憂いを懷くと雖も、復た退くこと無き也。五言詩を著わして、以て志を言う。」何晏の母は魏の武帝曹操の夫人として魏室に迎えられた人であり、彼自身も禁中に成長して、魏の公主を娶つた。曹爽の登場とともに脚光をあびたこの才子はわずか数年の榮華を盡くした後、曹爽の失脚に坐して司馬氏の手で斬殺された。

いつたいに政情不安定な魏の時代にあつても、急速に政治的緊張感を増し、人々を危機の意識におのかせるようになったのは、景初三年（二三九）春、明帝が病いに崩じた後、幼少の皇帝齊王芳を輔佐して權勢を振つた大將軍曹爽の登場以來のことである。ここで我々はしばらく嵇康の生きた三世紀中期の時代に照明をあてて、彼の危機感の表

嵇康の飛翔（興膳）

象「網羅」のイメージを生んだ時代相についていささかの考察を加えることにしよう。

明帝は死の牀に大尉司馬懿ならびに曹氏の一族で平生の信賴厚い曹爽を呼んで、ねんごろに後事を託した。時に司馬懿は六十一歳の高齢であり、曹爽もはじめこそこの年齢・徳ともに高い先輩に長上の禮をとり、敢えて專斷の舉に出ることはなかつたが、明帝が浮華の徒として用いなかつた何晏・鄧颺・李勝・丁謐・畢軌らを腹心とするや、彼らの進言によつてことごとくに司馬懿を壓迫したため、兩者の間には次第に冷たい空氣が流れはじめた。これから以後約十年間、曹爽・司馬懿の兩頭政治のもとで、嵇康は十七歳から二十六歳までの青年期を送つた。

正始五年（二四四）、折から曹爽に功名をたてさせようとする鄧颺・李勝らの進言によつて、蜀討伐の計畫が進められていた。司馬懿はこの遠征に強く反對したが、それを押しきつて遠征は敢行され、結局何らの戦果も得られなかつた。この事件をきつかけに兩者の反目は一その熾烈さを加え、以後數年間、晉書宣帝紀は二人の政争の記事に埋め

つくされている。曹爽の登場は知識人たちの出處進退にも大きな波紋をまきおこしたようであり、阮籍はこのとき召されて參軍の職を與えられたが、病いと稱して、辭して郷里に隱遯した。いくばくもなく曹爽は失脚して誅をうけ、世人みな阮籍の見とおしの深さに感服したという。また阮籍、嵇康の友人である山濤も曹爽の登場を見るや、官途から身を引いて隱遯した。今を時めく權力者曹爽の没落を彼らはすでに感知していたかのである。

曹爽は一族側近によつて政治軍事を獨占し、しばしば意のままに制度を改めた。一方司馬懿は志を得ぬままに、病いといつわつて朝政にあずからず、祕かに力を養つて反撃の機を狙つていた。曹爽はあるとき、腹心の一人李勝を遣つて司馬懿の様子をうかがわせたが、この老獪な策士の演出してみせた老獪ぶりに、曹爽らは安心しきつて、司馬氏に對する備えを怠つていた。たまたま嘉平元年（二四九）正月、曹爽一派が皇帝の駕に隨行して京師を留守にした間隙に乗じて、雌伏を續けていた司馬氏は突如クーデターを敢行し、政權を一氣に自らの手に掌握した。ここに曹爽、

何晏をはじめ、曹爽の一族幕僚すべて斬罪に服し、司馬氏は單獨に事實上の主權者となつたのである。

だがこれで國內に太平の期が至つたわけでは決してなく、景元三年（二六二）嵇康が四十歳の若さで世を去るまで政界の不安はなお頻々として相繼いだ。まず嘉平三年（二五二）、王淩らの企らんだ楚王彪擁立の陰謀によつて彪を殺し、同時に魏の諸王たちを京師に軟禁したのを手はじめに、司馬氏の専横ぶりは日ましに著るしくなり、魏王室の力は次々と削られていつた。この頃になると、逆に曹氏側からのレジスタンスが目だつてくることからそれがわかる。正元元年（二五四）、曹爽の舊臣夏侯玄が李豐、張緝らと企らんだ司馬氏轉覆の陰謀が發覺し、三族に至るまで誅に服した。因みに夏侯玄は曹爽の姑の子、李豐の子輅は魏の公主の婿、張緝は魏の皇后の父と、彼らはいずれも魏朝に深いつながりをもつ人々であつた。また同じ年、無能な皇帝齊王芳を廢して、高貴郷公髦をたてている。次いで正元二年（二五五）正月、鎮東大將軍田丘儉、揚州刺史文欽らの叛亂があつたが失敗し、儉は落ちのびるところを殺され、欽は吳に入つ

て難を逃れた。毌丘儉はかつて明帝に厚遇され、先年叛亂に敗れて斬せられた夏侯玄、李豐とも交わりを結んでおり、また文欽は曹爽の同郷人で、彼の知遇をうけていた。越えて甘露二年（二五七）、征東大將軍諸葛誕が淮南の地に據つて叛亂し、先に吳に亡命した文欽らの率いる吳軍がこれに合流するに及んで戰亂は擴大し、大將軍司馬昭自ら鎮壓に赴いて、ようやく翌年に至つて亂はおさまつた。叛將諸葛誕はかつて夏侯玄や、曹爽の腹心鄧颺と親しく、また楚王彪擁立に失敗した王淩や、二年前の叛將毌丘儉の誅殺をまのあたり見て不安に堪えず、財を散じて民心をとり結ぶとともに、數千人の死士を養つて災厄に備えたと傳えられる。

景元元年（二六〇）、司馬氏の專横に堪えかねた二十歳の魏帝高貴郷公はついに自ら最後の抵抗を試みた。魏志三少帝紀注の引く漢晉春秋にはいう。「帝は威權の日びに去るを見て、其の忿りに勝えず。乃ち侍中王沈、尙書王經、散騎常侍王業を召し、謂いて曰く『司馬昭の心は、路人すら知る所なり。吾は坐して廢せらるるの辱しめを受くる能わず、今日當に卿等と自ら出でて、之を討つべし。』と。」侍

嵇康の飛翔（興膳）

臣の制止もきかず、わずかの手勢を率いて司馬氏の強權に挑んだ皇帝はたちまち無殘な最後をとげた。この血ぬられた殺戮のくり返しがいつ果てるともなく續いたのである。

まさに魏全體を暗い霧がおおいつくした時代であつた。阮籍、嵇康らの放逸の士が鍾會、何曾ら名教を奉ずる司馬氏の一統から指彈をうけたのも、曹爽失脚後、司馬氏が擡頭してからの事件であるに違いない。^⑥何晏や嵇康の詩にあらわれる網羅のイメージは、この險しい現實を直視する眼底に彷彿した幻影であつたろうか。

また嵇康の妻が曹氏一門の一人沛穆王林の孫娘であつたことを思えば、嵇康の危機感の一つの原因を、司馬氏の專政下における魏室との姻籍關係に求めることもできよう。

毌丘儉の亂のとき、嵇康は自ら兵を起し亂に荷擔しようとして山濤に相談したが、反對されたので止むなく斷念したという。^⑦山濤は嵇康にとつて氣のおけない友人であつたとはいひながら、彼が司馬懿の夫人と縁續きだつたことを考慮に入れると、まさか反司馬氏のクーデターに賛成するとは思えないが、ともかくこの逸話は嵇康の置かれた困難な

立場をよく暗示している。曹爽の失脚後十數年間、執拗に魏室勢力の驅逐を企ててきた司馬氏の飽くなき執念をつぶさに見るとき、魏室との姻戚關係がいかなることを物語るか充分想像できるであろう。多分全くの傳説にすぎまいが、次のような話さえ伝えられている。王凌は揚州都督であつたとき楚王彪を擁立しようとして失敗し、また毌丘儉、文欽、諸葛誕らいづれも相い前後して揚州都督となり、魏室の中興をはかつて司馬氏に殺された。これら四人の文武の重臣が揚州すなわちもと廣陵といつた土地ではかなくも散つたという意味から、嵇康は得意とした琴の祕曲を廣陵散と名づけ、魏朝の散亡が廣陵からはじまつたことを示したという。（太平廣記卷二百三「韓卓」による）

嵇康は政治的には運命づけられた疎外者であり、また名教を以て經國の骨子とした司馬氏の爲政下にあつて、思想的には自ら求めて疎外者であり異端者であらうとした。自己の生きる社會の此岸で生命を充足し生の調和感を得ることを自發的に放棄したとき、人は彼自らの異端的立場に徹することに於いて調和を見出し、生の營みを續けるに足る

精神の平衡を保ち得る。しかしこの平衡は常識という社會的な廣い基盤の上に保たれているのではなく、いわば逆ピラミッドの安定感にも似て、ある微妙な一點によつて辛うじて支えられているのであり、それを保とうとする強靱な意志が不斷に働く場合にのみ平衡はよく持續性をもつ。自律的あるいは他律的にこの平衡を危うくする力の及ぶとき、それは激しい動搖の危険にさらされるであろう。阮籍が動亂の世に生きる名士の多く非命に死ぬさまを見て世事にあらずからなかつたのは、彼の放誕な異端の道に生の調和を求めようとしたからであり、また常に酣飲の中に輶晦したのは、平衡を亂そうとする他者からの挑發や、自己内部からの衝動を斷つためであつた。嵇康にしても事情はほぼ同様である。彼は「網羅」の干渉を遠く去つた形而上的世界の中で、玄虛思想と養生による生の充足感、調和感を求めていつた。しかし阮籍が終始よく自己の世界を全うし得たのに對して、嵇康のそれは刑死という非命の最後によつて崩れ去つた。彼の生涯をかえりみるに、意識の上では「網羅」を避けようと努めながらも、彼の剛直な性情は「網

羅」に挑みかけようとする衝動を押えかねてもあましていたように見える。あの「九患」を正面きつて押し出さずにはおかなかつた放恣な言語も、叛亂に役買おうとした果斷な行動もそれを示唆している。

論がやや横道にそれるが、魯迅は嵇康が「家誠」の中で息子の嵇紹に對し、努めて慎重に世に處するよう條理を盡して説いていることをとりあげて、嵇康らの放誕な反禮教的行爲が亂世に生きるための止むえぬふるまいであり、決して彼らの本態ではなかつたと主張するのであるが（魏晉風度及文章與樂及酒之關係）、私の目には「家誠」はおのづからまた他の意義を含むように見える。「與山巨源絶交書」の中で、「阮嗣宗は口に人の過を論ぜず。吾は毎に之を師として未だ及ぶ能わず。至性は人に過ぎ、物に與て傷う無し。唯飲酒の過差あるのみ」と阮籍の人格をたたえ、「吾は嗣宗の賢に如かずして、慢弛の闕あり」と我が身を顧みる嵇康は、放誕の中にも慎重さを失わぬ阮籍の處世を模範としながら、ともすれば強烈に發散しようとする自己の性情に、しばしばほぞをかむ思いを経験したのではあるまいか。

嵇康の飛翔（興膳）

嵇康は息子に向つて、「酒席での論争に加わつて人に恨みがかうことは嚴に慎しめ、そんなときは相手にならず遠ざかつていろ。」と誠めた後で、「もし遠ざかることができなければ酔つぱらつてしまふがよい。」と教えている。司馬昭の誘惑にも、鍾會の策略にも泥酔の假面を以て對した阮籍の處世がこのとき彼の腦裏にあつたと考へては穿鑿にすぎるだろうか。こうした「家誠」のむしろ慎重にすぎる戒めは、御し難い自己の性情に投げかけた反語としての一面をもつように私には思われる。

四

これまで私は「飛鳥」と「網羅」のイメージを媒介として、嵇康の詩の發想様式について検討してきたが、この二つのイメージから獨立した他の詩においても彼の發想の類形的型を確かめることができる。次にとりあげる「答二郭三首」其一是晩年の作と推測され、嵇康の心の平衡がいかに深い苦惱によつてあがなわれたか、そうしてまたいかに激しく動揺していたかを物語る。これは彼が河内郡山陽縣

の寓居を去つていづくかへ身を隠そうとするに當つて、郭
遐周、郭遐叔という恐らくは兄弟と思われる二人に詩を贈
られ、それに答えた詩である。

天下悠悠者 天下の悠悠たる者は

不能趨上京 上京に趨く能わず

二郭懷不羣 二郭は懷い羣せず

超然來北征 超然として來つて北に征く

樂道託蓬廬 道を樂しみ蓬廬に託し

雅志無所營 雅志は營むる所無し

良時遘其願 良時其の願いに遘い

遂結歡愛情 遂に歡愛の情を結ぶ

君子義是親 君子は義に是れ親しむ

恩好篤平生 恩好は平生より篤し

寡智自生災 智寡くして自ずから災いを生じ

屢使衆讐成 屢ば衆讐をして成らしむ

豫子匿梁側 豫子は梁の側に匿れ

聶政變其形 聶政は其の形を變う

顧此懷怛惕 此を顧えば怛惕を懷き

慮在苟自寧 慮いは苟か自ら寧んずるに在り

今當寄他域 今當に他域に寄らんとして

嚴駕不得停 駕を嚴しめて停まるを得ず

本圖終宴婉 本と宴婉を終げんと圖りしも

今更不克并 今更に并なる克わず

二子贈嘉詩 二子嘉詩を贈り

馥如幽蘭馨 馥として幽蘭の馨の如し

戀土思所親 土を戀い親しむ所を思えば

能不氣憤盈 能く氣の憤盈せざらんや

一首の口吻から察するに、この詩の作られる契機となつた嵇康の旅だちの背後にはどこか陰氣なかげりがある。あるいはこのとき何かただならぬ危機が彼の身邊に潛んでいたのかもしれない。ホルツマン氏は魏志王粲傳注が引く魏氏春秋の「大將軍嘗て康を辟さんと欲す。康既に世と絶つの言有り、又從子善からず、之を河東に避く。或るひとは世を避くと云う。」との記述と結びつけ、また「與山巨源絶交書」に「前年河東從り還りて云々」とあるのを引きあいに出して、この詩の製作年代を彼が河東に出發する頃

だとするが(《La vie et la pensée de Hi K'ang》p. 42)、一首の醸しだす異常な気分から想像すれば、確かに蓋然性は大いとしなければなるまい。^⑩因みに嵇康の居た河内郡は河東郡のほぼ東にあたり、郭遐叔が彼に贈つた詩の第五首には「縁有らば復た東に來れ」の句がみえている。冒頭の「天下の悠悠たる者は、上京に趨く能わず」の二句は、具體的にいかなる意味を藏するのか、なお定かにし難い。「悠悠者」の語彙については、「夫れ悠悠たる者は既に未だ效あらざるを以て求めず。」(養生論)という彼自身の使用例をも參考にして一應の解釋を施すならば、(俗事に)かわる意志のない人物のことであり、彼は繁華の上京にのぼつて塵俗にたちまじるをいさぎよしとしないというのであろう。それが「不羣」の懷いを抱き「超然として」北の地へやつて來た二郭を指すのか、或いは嵇康自らをも含むとするのか分明でないが、ともかく一首の冒頭は彼らの友情が現實の利害關係を去つた、純粹な心情の結びつきにはじまつたことをほのめかせている。

ここでは「飛鳥」や「網羅」等のメタファーの膜をとり

嵇康の飛翔(興膳)

拂つて、かなりむき出しに自らの心情を描きだしてみせるのであるが、詩の論理構造の面ではさきの「雙鸞」の詩と極めて多くの共通點をもつている。「道を樂しむ蓬廬に託し、雅志は營かわる所無し。良時其の願いに違あひ、遂に歡愛の情を結ぶ。」という表現は、雲中に仲むつまじく飛び翔つていた雙鸞を現實の人間像の中に持ち來つたもの、いかえれば雙鸞のイメージがはらんでいた親しき者同志の交歡の姿をより直截な形に置きかえたものである。高く飛ぶ鸞鳥が網羅によつて自由を制せられたように、二郭と嵇康の同氣の契りも他者の干渉によつて斷たれねばならなかつた。「智寡くして自ずから災いを生じ、屢ば衆寡をして成らしむ。」智とはすでに見てきた如く彼に缺けていた處世のための知恵を専ら指しており、二句全體としては、處世の智につたないために、爲政者の糾彈を多くこうむらねばならなかつた事實を示していよう。「網羅」の語はなくとも、あの暗いイメージは依然としてここに不氣味な影を落している。次の聯に至ると、恐怖は一層具象化され、膚に粟を生ずる怪奇な幻想を呼ぶ。「豫子は梁はの側に匿れ、

聶政は其の形を變う。」癲者に身をやつし啞をいつわつて、橋の下で祕かに趙襄子の馬車を狙う豫讓、韓相俠累を刺した後自らの刃で頭皮をはぎ落し、目玉をえぐり、腸を引き出して自殺した聶政——この不氣味な刺客の眼が現にいま嵇康自身の上に注がれているというのだろうか。メタファーを用いた幽微な恐怖の表現ではなく、具體的に「網羅」の正體を發いてみせているだけに、激しく動搖する嵇康の心が我々にじかに傳わつてくるようである。鸞鳥は網羅という惡意を避けて雲の彼方遠く飛び去つた。彼もまたいま執拗に身に迫る魔手を逃れて遠く深く身を潛めなければならぬ。「今當に他域に寄らんとし、駕を嚴しめて停まるを得ず。」

かく検討を加えてくると、理想境へ羽ばたきいでる志向を直接宿していないとはいいが、この一首が「雙鸞」の詩とほぼ同様の論理の脈絡をたどりつつ發想されていることに氣づく筈である。二郭に贈つた詩の第二首では理想世界へのあこがれが述べられ、論理構造の上からも「雙鸞」の詩に近いこと、また第三首では「鸞鳳は罽羅を避け、遠

く崑崙の墟に託す。」と飛鳥および網羅のイメージの交錯を通して超脱が暗示されていることなどについてはすでに第二章で觸れた。この三首の贈答詩において、危機意識に催された潛跡の志向と、理想を求めて高翔する超脱の志向とが嵇康の心中で表裏一體をなすものであることをいまい一度確認しておくべきであらう。

腦裏の一方の極に身を取り圍む陰慘な惡意に滿ちた現實が知覺され、そこにおける魂の苦悶を経て、彼の肉體、精神はもう一方の極である理想世界へ向つて飛びたとうとする。この現實と理想、形而下の世界と形而上の世界の微妙なからみあいの中から嵇康詩の發想は生まれており、兩者の均衡が破れて、力點が後者に傾くときには、遊仙詩系統の専ら理想圖のみをくりひろげる傾向が目につくことになる。また彼にとつて現實は何らプラスの働きをもちえず、嘔吐感、嫌惡感を催す對象としてのみ認識されており、阮籍のように現實の種々相に沈潛して多面的にその矛盾を探ろうとする意識は見られず、詩中に形象化される現實は多く觀念的、畫一的把握の域を出ていない。思辨的に多様な

反面このような缺陷を免れぬ嵇康の發想様式は、前稿で指摘した通り、本來的に抽象性を拂拭しきれぬ四言詩では思想詩としての長所に轉化し得ても、對象を克明に描き窮めることの可能な五言詩では逆にイメージの貧困を招來しかねないのである。飛鳥のイメージが可視の世界に羽ばたく鳥としては捉えられず、もっぱらメタファーとしての役割に終始することもその一つの場合とみてよいであらう。

五

嵇康の飛鳥のイメージの性格を更に明らかにするために、ここで當然阮籍「詠懷詩」との比較が試みられねばなるまい。私はさきに嵇康の飛鳥が何晏のそれと發想上の共通性につながることを指摘しておいたが、同様のつながりは阮籍の詩中にもまた見出すことができる。

鴻鵠相隨飛

鴻鵠は相い隨いて飛び

飛飛適荒裔

飛び飛びて荒裔に適く

雙翩凌長風

雙翩は長風を凌ぎ

須臾萬里逝

須臾にして萬里を逝く

嵇康の飛翔（興膳）

朝餐琅玕實 朝に琅玕の實を餐し

夕宿丹山際 夕に丹山の際に宿る

抗身青雲中 身を青雲の中に抗ぐれば

網羅孰能制 網羅も孰んぞ能く制せん

豈與鄉曲士 豈に郷曲の士と

攜手共言誓 手を攜えて共に誓を言わんや

（詠懷詩其四十三）

この一首の發想はすでに見てきた嵇康の詩のあるものと極めて近似する。鴻鵠の飛翔は阮籍の超脫的志向のメタファオリックな表現であり、詠懷八十二首中にしばしば描かれる飛鳥のイメージのかなりの數がこの範疇に屬している。

「雲間に玄鶴有り、志を抗げて哀聲を發す。」（其二十一）

「願わくは雲間の鳥と爲りて、千里一たび哀鳴せん。」（其二十四）

「鸞鷟は特り栖宿し、性命は自然有り。」（其二十六）

「鸞鳩は桑榆に飛び、海鳥は天池を運る。」（其四十六）

「鳴鳩は庭樹に嬉れ、焦明は浮雲に遊ぶ。」（其四十八）

「高鳥は天を摩して飛び、雲を凌ぎて共に遊嬉す。」（其四十九）

「林中に奇鳥有り、自ら言う是れ鳳凰と。」（其七十九）など

がこの系列のイメージとしてあげられるであろう。

しかし嵇康の飛鳥イメージのほとんどが一貫して現世からの超越を願つて羽ばたき出ようとするのに對して、阮籍は飛鳥の中に相い似た志向を託しながら、ある場合にはそれを自ら疑ひ否定し去るようなつぶやきを密やかに漏らすことがある。

崇山有鳴鶴

崇き山に鳴く鶴有るも

豈可相追尋

豈に相い追ひ尋むべけんや

(其四十七)

人言願延年

人は延年を願うを言うも

延年欲焉之

延年して焉にか之かんと欲する

黃鶴呼子安

黃鶴は子安を呼べども

千秋未可期

千秋 未だ期すべからず

(其五十五)

古來理想とされる延年の可能性に向つて阮籍は疑問を投げかけているのであり、詠懷詩が全體としてかくの如き論理の矛盾をしばしば露呈することについては吉川幸次郎教授がすでに言及された通りである。(中國文學報第六冊「阮

籍の詠懷詩について」下) 「獨り延年の術有り、以て吾が心を慰むべし。」(其十)と歌いながら、彼はなぜ自らの理想の前で逡巡遲疑しなければならなかつたのか。その一つの理由は、やはり彼の生きた救いのない現實に歸せられてよからう。先にあげた其四十三において、鴻鶴の飛翔を催すものは超脱の志向であるとともに、また世の「網羅」への恐れであつた。阮籍の身邊にも惡意の手がさまざまの形で忍び寄つていたことは嵇康の場合に劣らず、彼は深い洞察力と慎重な處世によつてよく難を避け得た。司馬昭が娘との婚姻を求めたとき、彼は泥醉すること六十日、ついにそれを斷念させたという。魏室とつながる人々の非命を目のあたり見て、權力というものの正體を彼は熟知していたのであろう。詠懷詩について顔延之が「阮籍は晉文の代に在つて常に禍患を慮る。故に此の詠を發するのみ。」といふのはこの間のいきさつをよく捉え得ている。出口を塞がれた暗鬱な社會の中では、理想をめざして飛びたつた鳥の羽翼も絶望の壁に打ちあたつては思はず苦悶の叫びをあげたのだつた。八十二首の中で阮籍の危機感を暗示することば

としてはこのほかになお「荊棘は原野を被い、羣鳥は飛びて翩翩たり。」（其二十六）「天網は四野に彌く、六翮は掩われて翳びず。」（其四十二）「綸の深ければ魚は淵く潛み、鰲の設けらるれば鳥は高く翔る。」（其七十六）、「適ま商風の起るに逢い、羽翼は自ずから摧藏す。」（其七十九）などをあげることができる。これらがいずれもなにがしか飛鳥のイメージとの相關によつて摘出されている點に目を注ぐべきであらう。

延年について筆が及んだついでに、ここで神仙に對する阮籍二人の立場の相違についていささか考察を致しておくことにしよう。阮籍の腦裏にあつた神仙界は、彼自身が仙化してその境に至ることを前提として認識されたというよりは、精神の自由な擴充の場として、さらにいえばフィクションの世界として想定された性格が濃い。「今吾は乃ち天地の外に飄飄し、造化と友と爲る。朝に湯谷に喰し、夕に西海に飲む。將に變化遷易して、道と周始せんとす。此の萬物に于ける、豈に厚からざらん哉。」（大人先生傳）という敘述が描くのは、養生によつて延年を獲得した神仙

の姿ではなく、常識の遠く及ばぬ形而上の世界に精神の暢達を求めてやまぬ大人の像である。こころみに、彼の哲學的論文の一つ「大人先生傳」は大人先生なる暢達者に假託したフィクションの形で描かれ、また「達莊論」は生死を齊しとする莊子の主張から發展していて、常識的な意味での延年とはむしろ齟齬してさえる。一方嵇康にとつては延年は養生によつて自らの肉體が必らず實現すべきものであり、彼は五穀を節し仙藥を服して神仙たらんと努めたのであつた。神仙界は人間の夢ではなく、到り得べき境地として認識された。「養生論」およびそれに續く向秀との論争は彼のこうした神仙觀をよく示している。阮籍、嵇康の神仙に對するこの微妙な認識の相違は、詩においては著しいものでないにしろ、讀者の側として一應は考慮に入れておく必要がある。

阮籍の飛鳥のイメージには以上のように嵇康のそれと相違する性格を見出すことができるが、詠懷詩の飛鳥にはまた同時に嵇康の詩とは全く質の違つたものが含まれている。

夜中不能寐 夜中 寐ぬる能わず

起坐彈鳴琴 起坐して鳴琴を彈ず

薄帷鑒明月 薄帷に明月を鑒れば

清風吹我襟 清風は我が襟を吹く

孤鴻號外野 孤鴻は外野に號し

翔鳥鳴北林 翔鳥は北林に鳴く

徘徊將何見 徘徊して將何を見ん

憂思獨傷心 憂思して獨り心を傷ましむ

(其二)

この一首では天翔ける鳥というイメージの表皮においてわずかに嵇康の詩との關連が見出されるのみであり、それらはらむ内容は全く別の範疇に屬する。

夜ふけて、遙かな平原に、あるいは山林に鳴きながら翔る一羽の鳥——この薄氣味のわるいグロテスクなイメージは、すでに見てきた一連の飛鳥と性質を異にするとはいえず、また何ごとかのメタフォリックな表現なのであるが、強いてその裏面を穿鑿するのは無用だろう。飛鳥のイメージはあくまで實景の中に羽ばたく鳥として捉えられているの

であつて、いわば一つの景として織りなされながら、詩人の殷憂を漠として漂わせるという効果をあげているからである。文選呂向注が「孤鴻は賢臣の孤獨にして外に在るに喩う。翔鳥は驚鳥なり、以て權臣の近きに在るに比す。晉の文王を謂う。」と説くのは、むしろがちすぎた詮議だてであろう。このほか「松栢は岡の岑を翳らし、飛鳥は鳴きて相い過ぐ。」(其十三)「走獸は交も横に馳せ、飛鳥は相い隨いて翔る。」(其十六)「孤鳥は西北に飛び、離獸は東南に下る。」(其十七)などは恐らく實景の中に捉えられた飛鳥のイメージの系列に入ろう。これらには景と情の綾なすイメージとしての特異さがあり、詠懷詩の特色である複雑深遠な思念を描くに極めて有効な成果をあげている。嵇康の飛鳥のイメージとの比較の對象をここで阮籍からさらに擴大して、二人に先だつ建安の詩人達についてみればどうであろうか。彼らの作品にもむろん飛鳥のイメージは數多く存在し、數の上でのみえば阮籍、嵇康に比して劣るものではない。しかし飛鳥のはらむ内容の面では二人とはかなり質を異にし、この稿の前半でとりあげた古樂府

「雙白鵠」の性格をほぼそのまま繼承している。古くは古詩十九首や蘇武の詩以來、詩人が鳥のイメージに託したのは、仲むつまじい二羽の鳥のごとく親しみ合う人間の姿であり、夫婦、戀人、あるいは友人間の愛情が鳥の姿を借りて象徴的に描き出されたのであった。「雙魚は目を比べ、鴛鴦は頸を交う。」（魏文帝「秋胡行」）「下に頸を交うる獸有り、仰げば雙び棲む禽有り。」（曹植「種葛篇」）しかしこうした幸福な状況はしばしば失われるものとして意識され、その契機となるのは別離であつた。「孤禽は羣を失ひ、雲間に悲鳴す。」（魏文帝「丹霞蔽日行」）、「草蟲鳴くこと何ぞ悲しき、孤鴈獨り南に翔る。」（魏文帝雜詩）「孤鴈は飛びて南に遊び、庭を過ぎて長く哀吟す。」（曹植雜詩）「飛鳥は樹を遶つて翔り、噉噉として羣を索む。」（曹植雜詩）「上に特り棲む鳥有り、春を懷い我に向いて鳴く。」（王粲雜詩）群を離れて獨り飛ぶ鳥の孤獨は詩人にとつて厭うべき不幸であり、自分が愛情を注ぐ人と再び睦みあえる幸福の回復が意識の底で常に祈願されていた。（ああ鳥のように翼があつたら）とはかない夢がその時飛鳥に託されたに違いな

嵇康の飛翔（輿膳）

い。「願わくは比翼の鳥と爲り、翮を施べ起ちて高く翔らん。」（曹植「送應氏」）「願わくは雙黃鵠と爲り、翼を比べて清池に戯れん。」（魏文帝「於清河見挽船士新婚與妻別」）「願わくは晨風の鳥と爲り、雙び飛びて北林に翔らん。」（魏文帝「清河作」）

建安の詩人たちの飛鳥のイメージはあらまし以上のような系列をたどつて理解できるようであり、總括すれば、人間相互の親和感の象徴としての性格が著しい。阮籍、嵇康あるいは何晏のように理想境めざして飛びたつイメージのないのは思想の面から考えて當然かと思われるが、また彼らの詩には阮籍の詩に見るような、孤獨を孤獨として容認し、獨り世と隔つた境涯からじつと惻然な觀察を續ける態度も、嵇康のように知音を失う苦しみに度々さいなまれながら、より高い次元に飛上して精神の充溢をはかろうとする意志も見られない。阮籍が「願わくは雲間の鳥と爲り、千里一たび哀鳴せん。」（其二十四）と普遍的な表現で悲しみをあらわしながら、すぐ續けて「三芝は瀛洲に延び、遠遊して長生すべし。」と悲哀の淨化を神仙界に求めている

場合を比較の媒介として思いあわせるがよからう。さらにまた「人は交^{まじ}わりの易きを知るも、交友は誠に獨り難し。」（阮籍「詠懷詩」其六十九）といい、「曰に余は敏ならず、善を好みて人に闇し。」（嵇康「幽憤詩」）という人間への不信感に満ちたことばも彼らにはなかつた。曹植の詩ではひたすらな人間への信頼感が厚い層をなしており、不幸な境涯に陥つたとき、幸福を回復する手だてとして彼は一途に他者の善意に働きかける。「野田黃雀行」において、鵲^{はいたか}という獐猛な惡意の爪に狙われた雀は、いま一方の惡意である「羅網」の懷に自ら進んで身を投じてゆく。それは惡意の中にすら一縷の善意を求めようとするかのようであり、少年によつて網が切り拂われ、雀が再び蒼天高く飛び翔つたとき、詩人はそこに力強いエネルギーの發散を認めるが如くである。

再び嵇康に目を轉ずれば、彼は建安の詩人たちとちがつて、人間の善意に絶對の信頼を置くことはなかつた。彼の周りは少しの隙間もなく荆棘に覆い盡くされ、その寒々とした視界は否應なしに彼を人間不信の厚い殻の中に追いつ

んでゆく。「善を爲すも名に近づく無かれ、惡を爲すも刑に近づく無かれ。」と現世の善惡の彼岸に立つことを教える莊子のことばこそ、決して長かつたとはいえぬ人生の終りにあたつて、激しく彼の悔恨の情をゆすぶつたのであつた。善惡という相對の世界を去つて彼がゆきつこうとしたのは世上の矛盾を止揚した絶對者の世界であつたが、超俗を願つて羽ばたきでた鸞鳥は結局網羅に制せられて地に落ちた。後世の顔之推は、生を養う者はまず第一に禍いを避け、身を安全にして生を安んじ、然る後に生を養うべきであるとして、養生を願いながら天命をすら全うできなかつた嵇康の誤りを手厳しく衝いている。「嵇康は養生の論を著わす。而るに物に傲りしを以て刑を受く。石崇は服餌の微を冀^{ねが}う。而るに貪溺を以て禍を取る。往世の迷う所なり。」（顔氏家訓養生）養生に失敗した嵇康の生涯は、說難を著わしながら舌禍に倒れた韓非と同様に大いなる皮肉であつたといえよう。

注

① この事件のあらましに關しては、中國文學報第十五冊の拙稿

「嵇康詩小論」第一章を参照されたい。

- ② 嵇康の詩の飛鳥のイメージについては、すでに林田愼之助氏に論がある。「嵇康の詩にあらわれた飛翔のイメージ」九州大學中國文藝座談會ノート12所収

- ③ この連作詩の構成に關しては、中國文學報第十五冊の拙稿第二章に述べた。

- ④ この一首を「雙白鵠」と名づけるのは玉臺新詠集であり、樂府詩集では「鸞歌何嘗行」の題名で収めている。いま玉臺所載のものを引用したが、樂府詩集では次の通りかなり違つた體裁になつてゐる。（傍點をほどこしたのは、玉臺新詠集には見られない句である。）

飛來雙白鵠、乃從西北來、十五五、羅列成行、妻卒被病、行不能相隨、五里一反顧、六里一徘徊、吾欲銜汝去、口噤不能開、吾欲負汝去、毛羽何摧頽、樂哉新相知、憂來生別離、躊躇顧羣侶、淚下不自知、念與君離別、氣結不能言、各各重自愛、遠道歸還難、妾當守空房、閉門下重關、若生當相見、亡者曾黃泉、今日樂相樂、延年萬歲期。

なお現在では「雙白鵠」「鸞歌何嘗行」とも樂府の原辭を後人が改竄したものとされておゐり、いずれが原辭に近いかについては説がとりどりであるが、余冠英氏は考證の結果、「雙白鵠」の方を本來の姿に近いものと結論している。（「樂府歌辭的拼湊和分割」漢魏六朝詩論叢所收、p.29~31.）

- ⑤ 魏文帝と曹植にそれぞれ一首ずつ「雙白鵠」に擬したと思は

嵇康の飛翔（輿膳）

れる詩がある。

鵠欲南遊、雌不能隨、我欲銜銜汝、口噤不能開、欲負之、毛衣摧頽、五里一顧、六里徘徊。（魏文帝「臨高臺」後半 樂府詩集卷十八）

曹植の詩は文帝ほどに模倣性は濃くないが、「雙白鵠」からイメージを得ていることは間違いない。またこの一首が嵇康の「鸞鵠」の詩と發想の面で類似していることも併せて注意しておく必要があろう。

雙鵠俱傲遊、相失東海傍、雄飛竄北朔、雌驚赴南湘、棄我交頸歡、離別各異方、不惜萬里道、但恐天網張。（曹植失題詩藝文類聚鳥部）

- ⑥ 嵇康が鍾會の憎しみを受けたことはすでに前稿で述べたが、阮籍も彼らから目の仇にされたらしく次のような話が傳えられている。

阮籍遭母喪、在晉文王坐、進酒肉、司隸何曾亦在坐、曰、明公方以孝治天下、而阮籍以重喪、顯於公坐、飲酒食肉、宜流之海外、以正風教、文王曰、嗣宗毀頓如此、君不能共愛之、何謂且有疾而飲酒食肉、固喪禮也、籍飲噉不輟、神色自若。（世說新語任誕）

鍾會數以時事問之、欲因其可否而致之罪、皆以酣醉獲免。（晉書阮籍傳）

- ⑦ 魏志王祭傳注には世語を引いている。

母丘儉反、康有力、且欲起兵應之、以問山濤、濤曰、不可、

儉亦已敗。

- ⑧ 晉書宣穆張皇后傳に「母河內山司徒濤之從祖姑也。」とある。また山濤が曹爽失脚後再び世に出て當路の人となつたときも、この縁續きがものをいつた。「(濤與宣穆后有中表親、是以見景帝、帝曰、呂望欲仕邪、命司隸舉秀才、除郎中。)(晉書山濤傳)」

- ⑨ 郭遐叔の「贈嵇康五首」は四言詩四首の後に五言詩一首を排しており、前稿で述べた通り嵇康に四言五言を組み合せた連作が二つあることを考えあわせると、この形式が嵇康を中心とするグループの間に好んで用いられたことは充分想像できる。

- ⑩ 「與山巨源絕交書」には「女は年十三、男は年八、歲、未だ成人に及ばず。」とあり、そのひとり息子嵇紹について晉書が「十一歲にして孤」(すなわち二六二年に父嵇康が死についたとき彼は十歲であつたことを意味する。)と記すことをつき合せてみると、山濤あての書簡が認められたのは嵇康の死の二年前の景元元年(二六〇)であり、また書中の「前年河東より還りて」という記述に従つて臆測すれば、嵇康が河東に旅立つたのは甘露三年(二五八)ごろであつたろうか。

- ⑪ この場合は養生に關心を持たぬ者といういみで使われている。

訂正

中國文學報第十五冊の拙稿「嵇康詩小論」で連作「贈秀才入軍」の第九首、第十首について、この二首に「詩經の一句をそのまま導入した個所は全く見られない」旨記したが(二十ページ)、

次に示すことくこれは大きな誤ちをおかしていることに氣付いたので、この部分を全面的に削除する。第九首の「良馬既閑」は秦風駟驥に「四馬既閑」の句が見え、第十首の「其樂只且」は王風君子陽陽に全く同じ句がある。筆者の疏漏をお詫びしたい。